

東北芸術工科大学 デザイン工学部

# 建築・環境デザイン学科 年報2019

Tohoku University of Art and Design

Department of Architecture and Environmental Design, Annual 2019



人間、社会、自然の関係を結び直すデザイン



TOHOKU UNIVERSITY  
OF ART & DESIGN



## はじめに

---

大学に立ち入ることさえ制限せざるを得ないという、今まで経験したことのない状況の中で私たちは2020年度を迎えました。台風や水害による災害が頻発した2019年、そしてコロナ禍に翻弄される2020年。自然環境への過大な負荷や潜在的な社会の歪みが顕在化してきている中で、私たちの学科が標榜する「人間、社会、そして自然との関係を結び直すデザイン」が、改めて問われているのではないのでしょうか。

今年度の年報では、地域社会と結びつきながら持続的な活動を継続してきた二つのプロジェクトを特集します。一つ目のツリーハウスプロジェクトは、2011年の未曾有の大震災の年に、元気をなくしかけていた学生や地域にもものづくりを通じて希望を生み出すことを目的として立ち上がりました。その後9年間で山形県内の小学校や公園、児童館などに12基のツリーハウスを設置、そのいくつかは常設のものとして日々地域の子供達に親しまれています。

二つ目は、2004年より景観施策の支援協力を続け（2012年度の年報にて文化的景観選定準備調査を特集）、2014年の文化的景観選定以降も継続的な支援を続けてきた大江町重要文化的景観保存活用の取り組みを挙げました。中世からの歴史の積層が価値となっている左沢に於いて、将来へ向けて生活生業の文化を伝える歴史的景観をいかに住民が支えてゆくか、選定後も継続的にサポートしています。

本稿を執筆している今も、手探りで、そして様々な知見を皆で共有しながらオンラインでの授業を構築し、実施しています。一方で、これまで看過してきた点も明らかになり、遠隔会議の可能性や書類のペーパーレス化など環境に配慮した社会の姿を見つめ直す契機となっているのではないのでしょうか。地域社会と緊密に結びついて継続してきた学科の諸活動についてもその価値を改めて問い直す機会と捉え、「想像力」と「創造力」を駆使して柔軟かつ着実に現代社会の様々な問題に向き合ってゆきたいと考えています。

(西澤高男)

## 目次

---

## 特集

---

東北芸術工科大学建築・環境デザイン学科では、大学での教育活動と並行して、地域と連携したプロジェクト活動を数多く実施してきました。今回の年報では、長年にわたって継続している2つのプロジェクトを取り上げます。

ツリーハウスプロジェクトは、東日本大震災で元気をなくしかけていた学生たちとものづくりを通じて活力を得るために立ち上げた活動で、2019年度で9年目を迎えました。これまでに13基のツリーハウスを県内の様々な場所に設置し、そのいくつかは今も現存し現地の方々に親しまれています。

大江町重要文化的景観保存活用取り組みは2004年に始まり、2013年の重要文化的景観の選定に大きく寄与し、選定後も町民がこの景観を引き継いでゆくための理解を深める活動を継続しています。

ここではこれらのプロジェクトの経緯と成果を振り返り、その意義について再考します。

---

|                     |   |
|---------------------|---|
| ツリーハウスプロジェクト 9年の実績  | 6 |
| ツリーハウスプロジェクト インタビュー | 9 |

---

|                 |    |
|-----------------|----|
| 大江町重要文化的景観の取り組み | 10 |
|-----------------|----|

---

## 教育報

---

教育の成果を、演習課題とその作品を中心にまとめます。

1年生では、前期にデッサンや立体造形、空間造形といった造形や表現の基礎となる演習を、後期に設計の基本である図学・製図やCADの習得、施工体験といった演習を設定しています。

2年生では、前期にまず木造建築の基本とその応用を学ぶ演習を実施。続いて建築や環境をデザインしてゆく上で欠かせない現地フィールドでのリサーチについて学びます。その内容を受けて後期には住宅設計課題に続けてその外構となるランドスケイプを続けて設計し、建築内外を一体的に計画。年間を通じて世の中の事象を多面的に捉え、建築と環境とをひとつつながりで考える課題を設定しています。

3年生は、前期前半/後半、後期前半/後半の4つの期間の中に各2つずつ設定される課題の中から学生の興味や関心、進路に併せて、履修するものを選択します。建築、ランドスケイプ、都市や集落のリサーチ、そしてそれぞれの領域を横断する内容の課題を設定し、地域の様々な問題を読み解き提案につなげてゆくトレーニングをします。

4年生ではこうした学びを経て、自ら課題を発見し研究・提案を行う卒業研究・卒業設計へとつなげてゆきます。

---

|     |           |    |
|-----|-----------|----|
| 1学年 | 建築・環境基礎演習 | 12 |
|     | インテリア基礎演習 | 13 |
|     | 建築・環境施工演習 |    |

---

|     |            |    |
|-----|------------|----|
| 2学年 | タイニーハウスの設計 | 14 |
|     | フィールドワーク入門 |    |
|     | 住宅の設計      | 15 |
|     | 外構の設計      |    |

---

|     |                |    |
|-----|----------------|----|
| 3学年 | エコタウンの設計       | 16 |
|     | 市街地計画          | 17 |
|     | リノベーション演習      |    |
|     | 農村計画           | 18 |
|     | 図書館の機能を擁した複合施設 |    |

---

|               |    |
|---------------|----|
| 大規模建築を考える     | 19 |
| まちの自然エネルギー計画  |    |
| ランドスケイプ総合デザイン |    |

|                 |    |
|-----------------|----|
| ブラウジングシティ       | 25 |
| ウォークアブルディクショナリー |    |

## 研究報

建築・環境デザイン学科での学びの集大成となる4年生、及びその内容をより深める大学院の修士課程では、学生たちが自ら課題設定をして調査した内容を、論文あるいは設計というかたちでまとめます。ここでは、こうした様々な課題に真摯に向き合った研究の成果をレビューします。

併せて、各研究室や学生・有志によるプロジェクト、学科で主催した各種講演会の概要についても掲載。特集記事でも紹介したように、地域の中で実践的かつ持続的な活動を続けているプロジェクトが多く、地域社会と密着した学びの場となっています。

また本号からは、学生たちが学外でのコンペティションで得た評価についても、ここでご紹介します。

|                  |                                       |    |
|------------------|---------------------------------------|----|
| プロジェクト<br>地域との連携 | 鮭川村 空き家再生プロジェクト<br>気仙沼大沢地区 復興支援プロジェクト | 26 |
|------------------|---------------------------------------|----|

|              |              |    |
|--------------|--------------|----|
| プロジェクト<br>環境 | ゲストハウスプロジェクト | 27 |
|--------------|--------------|----|

|                   |            |    |
|-------------------|------------|----|
| プロジェクト<br>リノベーション | 早戸温泉環境整備実習 | 27 |
|-------------------|------------|----|

|                  |  |    |
|------------------|--|----|
| プロジェクト<br>セルフビルド | 小屋づくりプロジェクト<br>「サウナのあるところ」<br>フィンランドサウナDIY | 28 |
|------------------|--|----|

|       |   |    |
|-------|---|----|
| 各種講演会 | 環境的未来型 西村佳哲氏<br>環境的未来型 東野唯史氏<br>ワンデイプロジェクト 小坂橋基希氏 | 29 |
|-------|---|----|

|                  |  |    |
|------------------|--|----|
| コンクール等<br>受賞者の紹介 | JIA東北建築学生賞<br>NORTH JAPAN DESIGN AWARD 2019<br>芸術工学会奨励賞<br>東北芸術工科大学学長奨励賞<br>学生主体型授業「合同成果発表コンテスト」 | 30 |
|------------------|--|----|

|         |                              |    |
|---------|------------------------------|----|
| 卒業研究・設計 | 山形版SDGsシミュレーション<br>カードゲームの開発 | 20 |
|---------|------------------------------|----|

|                    |    |
|--------------------|----|
| 御殿塚再生計画            | 21 |
| 職人の風景              |    |
| 都市からの分離と持ち運べる空間    |    |
| 高齢者施設の複合化における世代間交流 |    |

|                                      |    |
|--------------------------------------|----|
| 商店街の再興                               | 22 |
| 山形県長井市における散居集落の研究                    |    |
| 戸建住宅におけるヒートショック解決を<br>目的としたゾーン断熱のあり方 |    |
| 無人産直サービスの可能性                         |    |

|         |    |
|---------|----|
| 総評、公開審査 | 23 |
|---------|----|

|      |             |    |
|------|-------------|----|
| 修士研究 | Edible City | 24 |
|------|-------------|----|



## ツリーハウスプロジェクト 9年の実績



2011年の震災の年に、ツリーハウスプロジェクトは発足した。自宅や知り合いが被災したり、被災地へのボランティア疲れなどによる閉塞感に落ち込んだりしている学生が多くいたので、単純に楽しいことをやってなんとか打破しようと思っていたところ、学生からツリーハウスを作りたいという声が上がった。さっそく、大学の駐車場の木立の中に作るようになった。木の枝に床梁を架けて他方を柱で支えたシンプルなものであるが、屋根材には学生たちの手形を付けたシートをかぶせた手作り感満載であった。名前はエヴァンゲリオンの初号機からイメージした「初号樹」と命名された。



### 2012年 杉木立に本格的なツリーハウスを製作

翌年、本格的なツリーハウスを作りたいと、敷地探しを行った結果、金山町の旧林業センター前の杉木立を拝借することができた。4本の林立する杉にデッキを架けて作られた式号樹は、樹木の成長を妨げないドリフトピンを採用した。一見、木に金物を打ち込む残酷な方法のようであるが、木々をいたわる海外で一般に採用されている方法である。もちろん樹木の所有者の同意を得た上での作業となった。デッキの上で手すりや屋根を架けて完成し、最後に地域の子どもたちに名前を書いてもらった看板を作ってもらい掲げた。子どものみならず親たちもツリーハウスに登って、いつもと違う風景を楽しんでいた。



### 2013年 プレハブ化して複雑な栗の枝に立ち向かう

参考樹は、春夏のオープンキャンパス向けの小さなツリーハウスを大学の駐車場に作った。新入生たちにとって、工具の使い方などの勉強にもなった。メインの四号樹は、大江町で開催されたCBJ2012「小さな森のフェスティバル」に合わせて作ることとなった。前年の通直な針葉樹を異なり、ここでは枝を張った大きな栗の木が舞台となった。木の上での作業に限られるため、地上でプレハブ化したパーツを樹上でつなぎ合わせる方法が取られ、ボックス型となった。またフェスティバルの終了後には撤去しなくてはならないため、ロープで吊り下げる方法に拠った。学生たちは完成型のみならず施工の方法までしっかり考え、最後にワークショップとして、ツリーハウスに登るハシゴを集まった人たちとともに作り上げた。5mという高さに設置された四号樹は圧巻であった。



(上から) ツリーハウス「初号樹」、「式号樹」、「参考樹」・「四号樹」、「五号樹」

### 2014年 ツリーハウス○△□、そして六角形

翌年のオープンキャンパスには、球形の風鈴のような五号樹が作られた。この○型の五号樹と△型の参考樹、さらに□型の四号樹と合わせた「ツリーハウス○△□」を、東京芸大で行われ



た日本図学会全国大会に模型を出展し、好評を博した。夏には朝日町のAsahi自然観にて、近くにある空気神社や蜜蝋に因んで、空気の流れを感じる六角形フレームで構成された六号樹が作られた。眺めの良い樹上での一杯のコーヒーは至福であった。

#### 2015年 モバイルツリーハウスと式号樹の改修

2015年には、携帯性を考慮したモバイルツリーハウス七号樹が製作された。学生たちは複数のチームに分かれて案を出し合い、コンペを行った。メインの製作は、3年前に作った金山町の式号樹の改修である。落雪によって屋根が壊れてしまったため、今度はしっかりと落雪に配慮した形状と強度を考え、さらに自分たちで作った焼き杉の外壁を張るなど、挑戦的な試みであったが、みごとに完成した。この年は、金山町地域おこし協力隊の方々のサポートと、小屋づくりプロジェクトの学生たちと共同でイベントを開催し、金山町の鈴木町長にも来ていただき、地域とのつながりも得ることができた。

#### 2016年 四季をイメージした花・虫籠・雪の結晶を小学校に作る

2016年には、川西町の東沢小学校で、既存のツリーハウスの補修と、コンペで決まった春夏秋冬をイメージした八号樹の二本立て作業となった。ここでも川西町の地域おこし協力隊や地元の方々、先生方のご協力を得て、以前にも増して地域との交流（運動会、バーベキュー会など）が積極的に行われた。夏は虫籠をイメージした四角形、春秋は花をイメージした五角形、冬は雪の結晶をイメージした六角形のツリーハウスとなった。

#### 2017年 大学の竹林から伐採した竹材で組み上げる

2017年は、西川町にある弓張平公園で行われた「月山マルシェ」のメインイベントとして、モバイルツリーハウス九号樹と、大学の竹林から調達した竹材を利用した拾号樹が作られた。竹馬や輪投げなどの遊び道具も作り、子供たちのみならず老若男女、チャレンジしていた様子が微笑ましい。

この年の芸術工学会での発表で、「愛称を付けた方がより親しみを感じるのでは」との指摘があり、当時の在籍生が関わった八号樹から愛称を付けることにした。八号樹は「四季彩」、九号樹は「ikoi」、拾号樹は「編竹城」と決まった。

#### 2018年 玉串奉奠も執り行われた小学校跡地の本格派

ツリーハウスプロジェクトは、毎年の成果を本館で展示してきた。2018年は本館6階ギャラリーの大空間での展示となったが、空間全体をうまく利用して展示することができた。この年のメインの製作は、白鷹町の廃校となった小学校跡地に残された杉



(上から) ツリーハウス「六号樹」、「式号樹改」、「八号樹」、「九号樹 (ikoi)」





(上から) ツリーハウス「拾号樹 (編竹城)」、「拾壱号樹 (hinode)」、「拾弍号機 (木もれびハウス)」「拾参号樹 (ことりハウス)」

木立での作業となった。地元の人たちが考案した木製デッキの上に、さらに眺望を得るためのものであり、作業は困難を極めたが、子どもたちが喜んでくれるしっかりしたツリーハウス拾壱号樹 (hinode) ができあがった。お披露目会では、初めて神主さんによるお祓いと玉串奉奠も執り行われた。

#### 2019年 公園の遊具として作られたツリーハウス

2019年の活動は、昨年の拾壱号樹の雪囲いを解くことから始まった。メインの製作は、鶴岡市中央児童館の遊具として作ることとなった。今まで安全性の確保には十分気をつけてきたが、今回は公共施設内での製作となるため、学生たちも「都市公園における遊具の安全確保に関する指針」(国土交通省)を確認して、設計を行った。また複雑な樹形のケヤキに設置するツリーハウスの施工は困難を極めた。児童館の方たちが催してくれた「お披露目会」は、来賓の方々にお言葉をいただき、学生代表の挨拶、さらにテープカットも行った本格的なものであった。高学年用のツリーハウス拾弍号樹は「木もれびハウス」、低学年用のツリーハウス拾参号樹は「ことりハウス」と、地元の子供たちが名付けてくれた。また念願の学長奨励賞も受賞することができた。

以上ツリーハウスプロジェクトの9年間を振り返ってみたが、学生たちは毎年合宿生活の中で、日々の食事から材料の調達、施工の段取りなど、多方面に渡っての連携作業が求められ、机上の設計に留まらない貴重な実践体験を得ている。(山畑信博)



2018年に開催した本館6階ギャラリーでの展示会の様子



## ツリーハウスプロジェクト インタビュー —活動10年目を迎えて—

2020年で10年目を迎えるツリーハウスプロジェクト。その活動の様子について、2019年度リーダーを務めた長利咲代子さんと、プロジェクトの立ち上げから関わっている山畑信博先生にオンラインでお話をお聞きしました。

—2011年の震災後、ものを作ることで元気になろう、というコンセプトで始められてこれだけ続けていることは素晴らしいと思いますが、毎年何名くらいの学生が参加しているのですか？

長利 昨年度は、1～4年生あわせて30人くらいでした。これは今までの最大で、例年20～25人くらい。今年も、新1年生が3、4名、参加したいと言っています。

—今回のツリーハウスの特徴は？

長利 今回は、いろいろと大変でした。児童館で遊ぶ小さい子供から小学校高学年までを対象に2基製作し、独立した広葉樹に設置しました。複数の針葉樹を利用して設置した前の年に比べると木が硬く、枝の具合を確かめながら手探りで設置になりました。

山畑 台風による天候不順で製作が思うように進まなかったこともありまし。

—なるほど、見た目ではわからない苦労があるのですね。これまでのプロジェクトで様々なノウハウが積み上がってきていると思いますが、引き継ぎはどのようにしているのですか？

山畑 毎回、記録を残しています。あとは経験しながら、ですね。

長利 木に優しいツリーハウスとなることを、ずっと目指してきています。

例えば近年は木にドリフトピンを打ち込んでツリーハウスを固定しているのですが、一見

残酷に見えて、実は挟んで固定するよりも良いらしいのです。

—現場で学ぶことも多いですね。

長利 仮止めをするためのロープワークとか、かなり学びました。固定のためのピン打ちが大変で、木の硬さも、身を持って体験しましたね。製作は泊まり込みで合宿生活をしながら進めるのですが、個人的には組織をまとめるのはあまり得意ではなかったのです。プロジェクトの代表となって、ただ自分で仕事をするだけでなく全体を見回して適宜仕事を振り分けるなど、臨機応変に対応する柔軟さも身につきました。

—ところで、製作するツリーハウスのデザインはどのようにして決めるのですか？

山畑 まず学生たちとその年のクライアントとで打ち合わせをして、要求事項を整理します。デザインのイメージはクライアントから示されることもあります。学生たちの自由な発想に期待しています。

長利 チームに分かれてコンペ形式で決めて、クライアントと一緒にアイデアをまとめてゆきます。

—なるほど。常設のものも多いのでしょうか？

山畑 そうですね。古いものだと、式号樹は今も使われています。一冬で雪のため屋根が壊れたのですが、デッキを活かして上屋を改築して式号樹改となりました。



zoomによるオンラインインタビューの様子

—10年目を迎えて、今後のツリーハウスプロジェクトの展望があればお聞かせください。

長利 もともと「楽しむことを忘れずに」ということを合言葉に進めていたのですが、地域との関係で依頼を受ける中で製作条件や日程、予算などの要求に応えるため、なかなかそうもいかないことがありました。初心に帰って楽しむことを、目指したいですね。

山畑 学生たちが蓄積してきた経験と実行力が、昇華したデザインにつながってゆくと思います。

—コロナウイルス感染拡大を警戒する中で、合宿形式での製作にも慎重にならざるを得ないと思いますが。

長利 オンラインでアイデアを共有したり、記録集をまとめたり、今できることをしたいと考えています。

—歴代のプロジェクトのまとめや先輩との情報共有や交流など、節目の年だからこそ出来る振り返りの機会になれば良いですね。ありがとうございました。

(聞き手：西澤高男 2020年5月21日 zoomによるオンラインインタビュー)



1人では決して作ることができないため、チームワークが大事



土台を慎重に組み立てていく



道具を使い、丁寧に作業を進めていく

## 大江町重要文化的景観の取り組み



左沢地区をフィールドにした2017年度3年生演習「市街地計画」の風景（左）  
子どもたちを対象とした2019年度町民ワークショップ景観探検隊の案内チラシ（右）

重要文化的景観は、2004年の文化財保護法改正でできた新しい文化財制度で、地域における人々の生活、生業、風土により形成された景観地を対象とする。現在日本全国で65件が選定されているが、山形県内では2013年に選定された大江町と、2018年に選定された長井市の2箇所がある。もっとも東北には岩手県内の2箇所と計4箇所しかない。県内の2件はいずれも最上川舟運の流通往来で栄えた町場の景観が対象となっており、大江町では中心市街地である左沢の城下町の町並み、道路、河川敷などに加え、商家や蔵、寺社など25棟の建築物がその構成要素とされている。本学科では志村研究室で15年前から同町の景観施策の支援協力を続け、文化的景観選定までの歴史的建築の分布、実測調査などを実施してきたが、選定後の6年間は、保存計画、整備計画に基づく保存活用事業に加え、特に町民への普及啓発活動を中心に、継続的な支援を続けてきた。町の風景である景観づくりは、とりわけ行政というよりは住民が主役となり熟成していくもので、一朝一夕にできるものではない。中世の城下町である左沢では、近世、近代から現代までの歴史の積層がその価値として歌われている通り、代々の先人たちが大切に残してきた歴史を伝える風景を、町民の支えで今後も後世に伝えていくことが重要である。従って、選定までよりむしろ選定後、将来へ向けて、優れた生活生業の文化を伝える歴史的景観を、いかに住民が支えていくかをサポートしていくことが求められることとなる。

### 文化的景観選定後の活動

選定直後の2014年度から、文化的景観を町民がさらに深く理解し、身近なものとして捉えるためのワークショップとして、

建築物をスケッチしたり、型紙から模型をつかって並べてみるといった再発見型の住民向けイベントや、今後文化的景観を揭示するサインや看板の計画を建造物の所有者や周辺住民、地元高校生らに当事者としてそのあり方やデザインの条件を研究、検証してもらい、具体的なアイデアを提案していく取り組みを実施した。また、将来までこうした景観を引き継ぐことを課題として、地元住民から高校生へ、あるいは高校生から小学生へと町の歴史の意義や景観の魅力、その価値を知り、伝えていくオリジナルの検定問題を作り、3世代に渡って解答するワークショップを実施した。また、2017年度には学科3年生の環境計画演習「市街地計画」の課題対象敷地として左沢の町並みを選び、重要な構成要素となった商家や蔵等の建築物とその町並みが織りなす歴史的景観の特徴分析、連続立面図作成、ファサードの部分実測などを通じて、今後の歴史景観を守り伝える手法についての提案を行った。いわばよそ者である学生たちによる文化財景観を教材とした学習は、地域にとっては当たり前にある景観の価値に気づいてもらう好機となった。またこの間、保存活用のためのきらやか銀行の実測、記録保存のための大江屋旅館実測などの緊急調査や、文化的景観のエリア紹介と、その魅力を伝えるガイドマップとなる左沢鳥瞰絵図の制作など、幅広く文化的景観に関わる業務に学科、研究室として携わってきた。教育機関である大学として、地元の優れた文化財景観から学び、その成果を地元に戻していくことは、お互いにとって有意義な取り組みであり、真摯に取り組む学生と寛大に見守ってくださる地元の皆さんとの信頼関係を築く意義も深く、歴代の学科、研究室の学生たちが継続的に町に関わっていく意義は大きいと実感するところである。



### 若い世代に文化的景観の価値を認識させる

2019年度は、継続的に行われている町並みを形成する構成要素の建造物の修理事業に加え、今後、文化的景観の町をPR、解説し、構成要素の建築物の位置を示し、またこれらを観て回る見学ルートを示すサイン計画が策定された。その一環として、様々な世代に文化的景観を知ってもらい、どんなサインを計画していくかを検証するため、サイン看板計画を通じて子どもたちが文化的景観を知るワークショップが企画され、志村研究室を中心とした学科学生がこれに協力した。これまでの町民への啓発事業では、イベント参加者の平均年齢がどうしても高くなる傾向が否めず、肝心な次世代～若齢層への意識啓発が大きな課題となっていた。研究室ではこれまで、地元左沢高校の生徒による体験イベントや、高校生から小学生高学年へバトンを渡す「わが町左沢検定」などを通じて若い世代へのアプローチを試みてきた。今回はさらに世代を下げて、小学生低学年、未就学児にこうした町の魅力を体験してもらいイベントに挑戦することとした。第1回目は、地元のヒーローキャラクターと志村教授とが案内人となり、文化的景観の建造物や町並みを家族と歩きながら、元銀行の大金庫、防空壕跡を訪ねたり、石碑探しや測量用具の体験などを通じて、キーワードを集めるいわば入門編の再発見型イベントを実施。さらにその第2回目として、日本一君、プクちゃんといった地元大江町のキャラクターを描いた様々なサイン看板を、材質や大きさを変えながら、実際の建造物や街角に貼り付け、子ども達の目からの認知性や好感度などを実際に検証する実践編のイベントを計画。その準備を研究室で行っていたが、残念ながら新型コロナ対応で実施は見送られた。1回目のイベントは、総計68名の親子連れの参加で賑わい、事後アンケートからも子ども達が楽しみながらも文化的景観の特徴に触れ、親子でその価値に気づききっかけとなった様子が伺えた。おそらく全国の文化的景観地でもこうした世代

向けの行事は珍しいと思われ、小さな町だからこそできる、身の丈にあった取り組みは意義深いものとする。なお、これらのイベントでは企画段階から本学学生の他、子育て中の母親が参加しており、子ども達への配慮や気配り、実施可能な取り組みの内容検討といった場面での確かなアドバイスを受けており、企画から実施までを30歳代から0歳代までの間の世代で完結した珍しい景観まちづくりイベントとして特記すべきと同時に、こうしたコラボレーションは次なる子育て世代予備軍ともなる学生達にとってもよい経験になるのではないかとと思われる。

### 全国に向けて魅力を発信

併せて2019年度は、全国の重要文化的景観を持つ自治体で構成される文化的景観全国協議会の大会が持ち回り制で、大江町を会場として開催され、北海道から沖縄までの県外29自治体の文化財、景観の専門職員、各地の活動市民や専門家など総計112名が大江町に参集し、3日間に渡り現地見学、講演会、パネルディスカッションや情報交換会などを行なった。おそらくこれほどの規模で文化的景観を目的として全国からの訪問者を一度に迎える機会は珍しく、大江町役場は全庁を挙げて、また地元商店や町民らも協力して彼らを迎え入れ、全国に認められた景観を育てる町民としてのシビックプライドの醸成に大きな役割を果たせた。出席者からは、決して大きな町ではないが、歴史を伝える建造物やその魅力的なストーリー、町民のみなさんの努力や、本学教員や学生を始めとする専門家との連携ぶりに高い評価をいただいた。

地元大学として、地域と連携してまちづくりに関わることは、息長くwin-winの関係であり続けることが大切である。今後も行政の協力を得ながら、良きパートナーとして手を取り合って尽力していきたい。(志村直愛)



歴史的景観の町並みを見て歩く景観探検隊イベント参加の親子と学生スタッフ



地元ヒーローシェイガーから景観探検隊参加賞をもらう親子連れと学生スタッフ



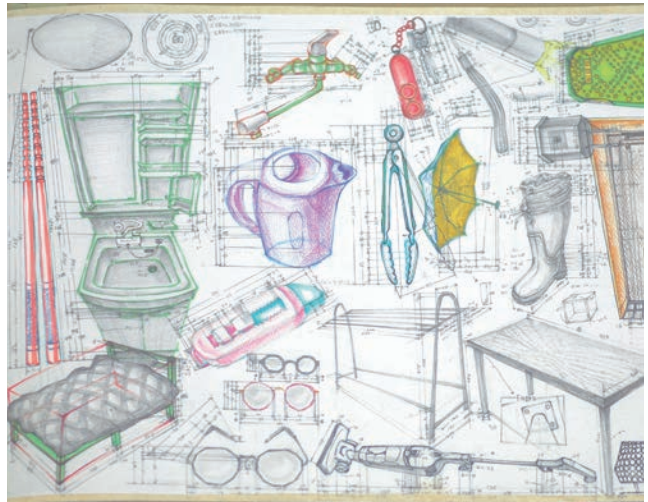
地元キャラクターを用いた案内看板検証ワークショップの試作看板準備作業（延期）

1学年 建築・環境基礎演習

入学した1年生が最初に取り組む演習である。以降、学科演習で必要な、描く・造る指先の基本技術と、手を動かしながら考える思考技術の体得がねらいである。具体的には、人・物・空間を描きながら観察し、身体そのもの、身体と関係する物や空間のスケール感覚、身体の尺度を超えて広がる自然のスケール感覚を身につけてもらいつつ、ものの成り立ちや互いの関係性に想いを巡らす思考を促す。立体制作も描くことと同様に、力学的な成り立ちを体感的に理解してもらうことがねらいである。つまり上手い下手ではない。この演習で最も大事なことは観察する力とそこからの思考を展開することである。

しかし、絵が上手くて立体を綺麗に造ることができる器用さがあるって困ることはない。そのため形を正確に捉えて描くトレーニングや、決まった寸法・形の模型制作も行い、同時に、その過程で気がついたり考えたりしたモチーフの本質や自身の思考をメモとして言語化することも課している。また、時間外学修では、身の周りのものを描きながらとことん寸法を測ることや、街に出かけ、人・物・空間が総合し、リアルに息づいている「風情」を描いて切り取ること、「見えないもの」を描くことで表現することなどにも取り組む。

最後はポートフォリオを作成する。活動履歴をまとめる作業は、成果を自身と他者に向けて整理して提示する行為だが、今後身を立てる場面で必要になる。自己の社会化を図る方法として取り組んでもらった。各々制作したポートフォリオを用いて学修の成果、自身の成長の実感と気づきをプレゼンテーションし、演習はクライマックスを迎えた。(渡部桂)



トコトンを測る・描く (李洗庭)



演習成果を1冊にまとめたポートフォリオ



1



2



3



4

1 演習風景

演習環境は全て自分たちで準備・片付けを行う。建築や環境のデザインには空間の使い方も大事である。また協働もデザインには大事である。

2 風景のパーツを描く

風景を構成しているパーツを描くところからはじめる。樹木は葉や枝を描き、部分を理解してから樹姿を描く。

3 風景を描く

空間を描く課題は徐々に技法と難易度が上がる。最終的には観察力と描く技術を総合し、一つのまとまった風景を描く。

4 軸組による立体造形

模型の制作は、スチレンボードを使った面による造形と、桧の角材を使った線(軸)による造形を経験した。まずは基本を習得し、最後には個性を表現する。



## 1学年 インテリア基礎演習

1年生が最初に自ら空間を発想し、創造する演習である。立方体という抽象的な形状の内部空間とその幾何学的な展開について手を動かしながら考え、模型によってプレゼンテーションすることを課題としている。最初は4畳半に相当する2.7m立方の「茶室」をつくることから始め、次にその立方体の空間に幾何学的な空間操作を施すことによって空間を変容させる課題、そして確変の長さが2倍となる5.4m立方の空間を創造する課題へと、段階的にサイズと抽象度を引き上げてゆく。その過程で、人の入る空間のスケール感を習得し、幾何学的で抽象的な形態と具体的な空間との関係について考えると共に、空間の分節や動線の挿入といった様々な建築的な操作に少しずつ慣れてゆくことを目指した。約2週間ごとに締め切りを設けて計3回行った講評会には、山形・仙台で活躍する本学卒業生を含む若手建築家にもゲスト講師として参加していただいた。建築の回答は一つではなく様々な評価基準があるということを、講評会でのやりとりで感じたのではないだろうか。模型製作を通じて繰り返し「手で考えた」経験と併せて、大学生になりたての学生たちにとって今後の糧となれば幸いである。(西澤高男)



若手建築家による講評会の様子



徐々にスケールアップし、手を動かして空間を考える

## 1学年 建築・環境施工演習

大学裏手の都市公園「悠創の丘」の一角の雑木林をフィールドにし、公園の管理として草刈りや樹木の伐採を行いながら、その過程で生まれる空間や資源を活かして、自然に調和し人間の利用を助ける空間と構造物を実際に計画・設計・施工する。2019年度は、20年以上前に里山環境の復元を目的に当学科の教員・学生有志が植樹したコナラやミズナラが立派に成長したため、萌芽更新（樹木を伐り、切株から若くて新しい枝を出して雑木林を若返させる）を念頭にまとまった面積の皆伐を行い、そこから多くの木材を得た。それらを用いて公園における人の視界、視線、動線、活動を考察し、グループ作業により現地に必要と考えられる機能を持たせた構造物を制作した。構造物自体の強度や耐久性にも十分配慮し、急斜面を抑える土留め、移動のための階段、歩行を誘導する柵、休憩のための腰かけなどが整備された。学生は実体験を各自の学びとするため、途中の観察や考察、制作物の計画・設計、最後の計測・記録をノートにまとめ成果物とした。なお、本演習は「学生主体型授業『合同成果発表コンテスト』」（2020年2月1日DF“つばさ”主催）において、学生が発表を行い第1位の成績を修めた。(渡部桂)



皆伐した雑木林に階段を整備



伐採したナラの観察

## 2学年 タイニーハウスの設計

この課題では、建築設計の第一歩として、木造建築の基本となる軸組構法による建築を設計する。軸組部材をどのように組み合わせたら構造的に成り立つのかを意識しながら設計し、さらに部材構成の理解を深めるために軸組模型を製作する。テーマは、床面積7.3m<sup>2</sup>（四畳半）で構成される「タイニーハウス」で、敷地は学内の平坦な場所を各自が探して決める。各自が設定した「何か」をするための空間とはどのようなものなのか、空間と機能を結びつけ、さらにヴォリュームを的確に把握して、外から聞こえてくる音、流れる空気、差し込む光、それを包み込む素材や構造などを総合的に考えてゆく。富岡悠人の作品は、心地よく涼むことをテーマに、大きく張り出した軒の出を、桔木という伝統的な手法を使って実現し、さらに敷地に合わせた床面の張り出しや床束の貫などにも工夫が見られ、開放感を実現した点が高く評価された。野村萌夏の作品は、切妻屋根のボックスという単純な形態であるが、内部に入ると正面にある全面ガラス張りの開放感とその前に林立する柱の存在が、自然と人工の対峙を模索する場としての明快な空間を作り出している点が高く評価された。（山畑信博）



最優秀賞 富岡悠人（上） 優秀賞 野村萌夏（下）

## 2学年 フィールドワーク入門

建築や環境に関わるあらゆる分野の取り組みにおいて、現地を歩き、調べ、記録し、情報の分析から課題究明、提案、デザインに至る一連の流れの中で、その基礎的作業となるフィールドワークの技術を習得することは、欠かすことのできない学びとなる。この演習では、前半に伝統技法で造られた建築物の実測調査、その外構部分と周辺の自然環境との相関関係を数値で明らかにする計測、作図作業を通じて、立体情報を平面情報に置き換える調査手法と技術を学ぶ。本年は昨年まで調査対象としていた本学所有の農家の主屋と納屋に替わり、大学周辺の上桜田地区に分布する、地元管理の上桜田地蔵堂、大山住尊堂、太子殿、中桜田諏訪神社の4棟の小堂宇を設定。2年生を4グループに分けて実測部位、担当図面を分担して実測、野帳記録を作成し、CADによる清書を実施した。また恒例の環境エクササイズでは、担当教員3名の解説を聞きながら、全員で上桜田周辺を巡り、農地や森林の現況を観察して歩いた。寺社建築の実測では、歴史的建築としての意匠特性や伝統的な木造の構造や構法を理解しやすく、また地域住民の信仰の姿など民俗学的な知見も広がる意義深い体験となった。（志村直愛）

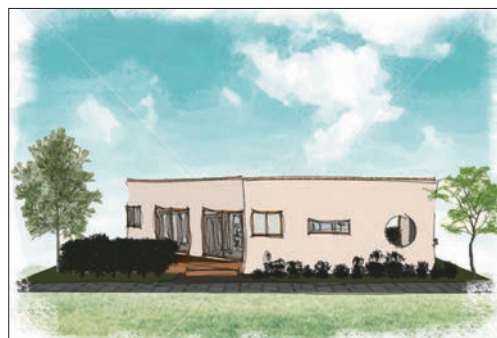


エクササイズの風景（上） 実測の様子（下）



## 2学年 住宅の設計

2年生の住宅は学生にとって最初の本格的な設計である。大学の周辺の住宅地をいくつか分割して、それぞれの敷地に合わせた住宅を設計する。一つの家族を想定して、そこを基点にコンセプトを考え、住宅を計画する。住宅の各機能の配列や日射、通風などの環境面、構造の合理性など様々な視点から設計を行う必要がある。敷地が異なり、そこでの住まいかたも異なる。当然、アウトプットも異なる中で、初めての設計となる。最優秀の2点は、比較的単純な構成であることで、設計の強度があった。実際の2つの案はかなり対照的な案である。泉里奈の作品は民家をモチーフにしたものである。民家の形式と現代的な個室を中心とした住宅を融合させることはなかなか難しいのだが、あまり細かな操作をせず、素直に必要な機能だけを加えたことで、新しい現代的な民家の可能性を示した。一方、草刈咲希の作品は、中庭と住宅を幾何学的に解いた平家での設計である。敷地全体を使うシンプルな構成でモダン、そしてのびやかな印象が良かった。(竹内昌義)



最優秀賞 泉里奈 (上) 草刈咲希 (下)

## 2学年 外構の設計

2年生の「住宅の設計」における敷地内のランドスケープデザインを行う演習である。各戸の敷地デザインに加え、1街区10世帯の中央を貫く共用の遊歩道を設け、その利用の仕組みや各住戸から遊歩道への接続方法も含めたデザインを求めた。各敷地は平坦だが、街区全体が斜面地にある設定から、上下2段の造成宅地となり、その段差が生まれる場所に共用空間（遊歩道設置空間）を位置づけたため、土地の段差の処理も考える必要があった。住人の設定は住宅設計を引き継いだ。今一度居住者の生活や行動パターンを洗い直し、その活動から空間設計条件を整理していった。具体的なデザインにあたっては、住宅街のフィールドワークによりアプローチ、敷地境界、庭空間、排水、植栽樹種、周辺の景観等を調査し、デザインのヴォキャブラリーを増やして臨んだ。最優秀の熊谷遥奈は、住宅設計の段階から敷地内の空間を一体的にデザインしていたが、植栽計画、敷地に導水した水路の役割と形状、表現としての図面や模型の精度を高めた。木村遥や三富俊は、遊歩道に果樹を用いたり、水路を設ける提案をし、住民の交流促進や空間や資源の利用について具体像を見せてくれた。(渡部桂)



最優秀賞 熊谷遥奈 (上) 木村遥 (下)

これまで南北に隣接した2つの敷地を設計条件としてきたが、今回は敷地を広げ、4人家族が住む5棟の住宅を設計する課題とした。大学に周辺の西に面した傾斜のある南北に長い敷地であり、3mの高低差を考慮した配置や駐車場の配置が必要となった。

住宅の設計の自由度は増したが、共用部や駐車場を勘案し、全体計画を立てなければならない。その点で難易度は増したと考えられる。また、眺望が望めるのは西方向で、眺望と日射のせめぎ合いを考えなければならない。

昨年は2軒分行っていた温熱計算は簡略化し、5軒中最も不利な1軒とした。計算に取られる時間を、より設計に振り向けたいという意図がある。

エコハウスの設計で大事なのが、日射取得である。それを考えながら、設計は進められる。一方、その重要な冬季の日射取得が十分に配慮されていないものも散見された。自由な設計の中でも建物の断熱性能を上げることは可能だが、設計段階での配慮が不可欠である。自然のエネルギーを賢く利用することが求められる。当初は配置計画に戸惑っていた学生も、最後にはその完成度をぐっと上げて仕上げてきた。(竹内昌義、三浦秀一)

### 講評

梅澤一燈の作品は、1階にリビングがあるプランと、2階にリビングがあるプランを、敷地中央に共用スペースを設けるように、円周上に建物を少し振って配置している。プライバシーに配慮し、リビングの快適性が意識された優れた案であった。配置とプランの工夫によって、特に共用部の採光が上手く確保されている。フレームを利用したデザインは、エコタウン全体に統一感を与え、集落のような風景を生み出している。

寛野雅人の案では、建物の隅をカットすることで生まれる空気を露地として使っている。配置ではなく、建物を加工した点で興味深い案となった。単純な形だが絶妙なスペースを獲得している。

近藤暉人の案は、住戸形式を集合住宅にすることで、建物の間にできるスペースをなくし、南北の隣棟間隔を取り、共用部も魅力的に出来ている。特に北側を3階建にしたことで、日射をより取りやすくした。

安部美希の案は、南面採光をどの住戸にも同じように取り入れるため、細長い住戸を5つ並べた特徴的なプランだ。ただ細長いだけでなく、断面的な構成を工夫した点が評価された。(竹内昌義)



最優秀賞 梅澤一燈 (上) 寛野雅人 (下)



最優秀賞 近藤暉人 (上) 安部美 (下)



### 3学年 市街地計画

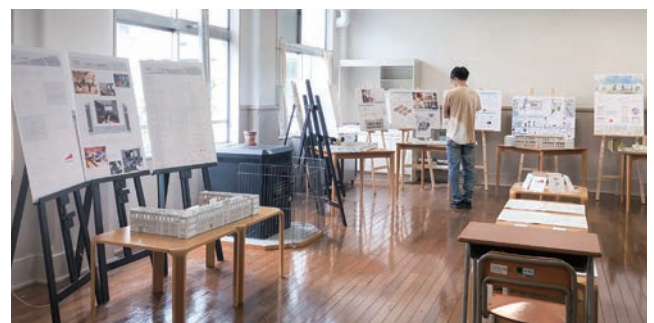
市街地計画は、山形市内中心部の街場を対象に、自然、空間、生活、歴史の4つの視点から土地の文脈を読み解き、まちの魅力や問題点をあぶり出し、豊かで持続性のある都市生活を実現させるこれからのまちづくり方策を考察、提案していく演習である。本年は、調査検討対象地を羽州街道沿いの城下町の町人地、寺町を包括した十日町、三日町、八日町の3町域に設定し、土地利用図や街道沿いの連続立面写真の作成などの分担作業から、現地踏査を通じて設定した各自のテーマに基づき、提案のプレゼンテーションボード表現の精度を上げるエスキスを重ねていった。旧街道沿いに拡大していく数多ある駐車場の分布、稼働率を綿密に調査し、空き空間として活用できる時間帯に人が集う生活舞台に転用するという、市街地の問題点を逆手に取ったリアリティのある由利榛菜の案や、古い住宅街に網の目のように広がる路地空間を丁寧に記録、分析し、袋小路となった路地を繋ぐことにより、新たな災害避難動線やコミュニティの展開を図ろうと、美しい立体配置図スケッチを駆使して提案を完成させた新田ゆいの案など、各自の豊かな発想と着眼点が光る秀作がいくつも生み出された。(志村直愛)



最優秀賞 由利榛菜 (上) 優秀賞 新田ゆい (下)

### 3学年 リノベーション演習

昭和初期に建てられ、登録文化財にも指定されている山形市第一小学校旧校舎をリノベーションする。この建物は現在「まなび館」と呼ばれ、地下と1階のみが地域の交流施設として使われているが、2階と3階はコンクリートむき出しの廃墟である。その特徴を生かし、クリエイティブシティセンターへ用途変更する。この演習では、プログラムの立案から空間やインテリアのデザインまでをチームで行った。社会に出れば共同で仕事をする場合が圧倒的に多いため、他者とディスカッションし、集団の中での自分の役割の見つけ方などを経験する。最優秀賞に選ばれた作品は、アトリエスタジオなど、クリエイティブな活動が出来る小さな「ハコ」を施設内に点在させている。文化財である建物に負担をかけず、新しいデザインと歴史的建築物との調和も意識している。また、屋外のランドスケープも公園のように誰もがアプローチしやすいデザインだ。完成した全ての作品は学び館に展示され、市民や他学科の教授陣からも高い評価を得た。これらを経て、山形市が加盟しているユネスコの創造都市ネットワークの活動拠点として、2020年にクリエイティブシティセンターがオープンする予定。(馬場正尊)



最優秀賞 4班 (上) まなび館での展示の様子 (下)

### 3学年 農村計画

農山村のまちづくりを、環境と住民という視点で学ぶ演習として始めて3年目になる。対象は人口約3千人の白鷹町蚕桑地区、人口約3000人である。過去2年間の演習で収集された情報より地域の人口、土地利用、農業などの産業といった要素を読み取った上で、地域の関係者6名に現場を案内してもらいながらヒアリングを行った。その人柄と仕事ぶりはその土地に根差した魅力的なものであり、通常は知り得ないような話が聞ける貴重な時間となった。地域の中では当たり前となっている人と環境のつながりは、取り立てて地域の中で話題にすることもないであろうことが多く、淡々と語られる言葉から何を読み取るかが重要なポイントになる。学生達には、そうした当たり前の日常の魅力や環境とのかかわりをいかに他者にも分かりやすく伝えられるかを求めた。新関千広は、取材結果を地図に地理的な情報を加えながら、そこで生きる人々が重なるように冊子としてまとめた。3年間の継続的な演習によって地域を深掘りできたが、この貴重な情報をいかに外に発信していくかが、地域にも、そして我々にも問われる。(三浦秀一)



優秀賞 新関千広 (上)  
白鷹町での現地調査の様子 (下)

### 3学年 図書館の機能を擁した複合施設

図書館は近年、本を収集し貸し出すだけの場所から、生涯教育や交流、地域活動等の拠点としての役割を担う場所へと変革を遂げてきている。この課題では、まちの現状を読み解き、地域社会の核となるような機能を擁した図書館施設を設計した。現在山形市立図書館のある場所を目の前に広がる小荷駄町公園も含めて一体的に敷地とし、隣接する南部公民館・体育館と併せて相互の関係についても考えることも求めた。本課題ではSALHAUSの柘澤麻利氏がゲスト講師として参加し、2週間に一度の各段階および最終の講評会で、多数の履修学生に対して丁寧な指導を頂いた。大室新の案は、敷地南北に台形の躯体を複数配し、斜めの壁の内側と外側に明るさや開放感の異なる2種類の空間を生み出すというもの。直行方向に躯体を貫くパスは性格の異なる空間を交互に体験する場となり、多様な関係性を生み出すことに成功している。完成度も高く、特に詳細模型はその空間の魅力を十分に伝えていた。松井ひかりの案は敷地に広く屋根を掛け、その内外に大きさや密度の異なる多様な居場所を生み出すというもの。課題で求められた新しい図書館の姿について、丁寧に応えた提案となっていた。(西澤高男)



最優秀賞 大室新 (上)  
優秀賞 松井ひかり (下)



3学年 大規模建築を考える

八重樫直人氏を講師として迎え、本学科の馬場、竹内の建築家3人で担当した演習である。近年、卒業設計でも小規模でパーソナルな空間への問いかけが多く、ある規模以上の建築本来が持つ複合性やそれが周辺の環境に与える影響などを考慮した大型の建築を扱うことが少なくなった。単純にそういった大規模建築を建てる可能性が少なくなったからかもしれないが、複雑性を扱うこと自体は減っていない。演習ではそういう複雑性を受け入れつつ、建築として表現することの意味を考えた。徹底的に大きい建築を検討し、大きな模型を毎週作ることで、考え方をデベロップする方法を追求した。課題内容は現在「やまぎん県民ホール」がある場所を対象敷地とし、山形にとって必要な複合施設を設計する。優秀賞は模型を作りながら、プロジェクトをドライブできた2案に与えられた。大室新は町の中心部に、木材の製材工場を持ち込み、林業とそれを表現するギャラリー空間を構成した。近藤暉人は交差する壁を反復させる方法で、図書館と美術館の複合施設を組み立てた。どちらも修正を加えながら、コンセプトはより強いものになったと考えられる。(竹内昌義)



最優秀賞 大室新(上) 近藤暉人(下)

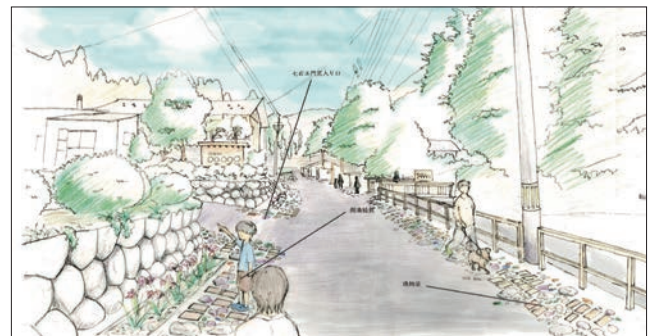
3学年 まちの自然エネルギー計画



最優秀賞 由利榛菜

この演習は農村計画の続編として、同じ白鷹町蚕桑地区を対象に、自然エネルギーに着目したまちづくりの提案を行う課題で、森林を活かしたバイオマス、川を活かした小水力、休耕地を活かしたソーラーシェアリングなど地域の資源を定量化しながら提案を行ってもらった。由利榛菜はグーグルマップから独自に農業ハウスの分布を調査し、二宮金次郎プロジェクトなどのユニークな提案を行い、その空間イメージまで伝わるような成果となった。(三浦秀一)

3学年 ランドスケープ総合デザイン



優秀賞 船田りお

人、まち、自然、暮らしを一体のランドスケープ(土地、風景)と捉え、その未来を総合的にデザインする演習。対象地は山形市東部の陶芸の里・平清水である。船田りおは、居住地が観光地でもあることに注目し、歩行者の安全強化と歩く楽しみや地域性を表現する歩道空間をデザインした。赤間未来は、人と水の繋がりを見つけ、水路管理と歩行性能を高めるフットパスを提案した。どちらも派手さはないが、実態に沿う堅実で重みのある提案であった。(渡部桂)



日々の行動が、地域、ひいては世界に影響を与えている実感はあるだろうか？ 気候変動、地域経済の衰退、人口減少など、地域の持続性を脅かす課題は、実は私たち一人一人の行動や選択によって生み出されているものでもある。そうは言っても、なかなか実感が湧きにくいものかもしれない。世界では2015年に国連サミットで、2030年迄に持続可能な社会の実現を目指すため、貧困、気候変動、生物多様性など17の目標からなるSDGs(持続可能な開発目標)が定められた。先導的な自治体や企業などでは既に取り組まれているが、山形においてSDGsという言葉を目にする機会は少なかった。

そこで、難解な社会課題を地域の人々に周知するため、ゲーミフィケーションの手法を使った教育ツールを開発した。山形版SDGsシミュレーションカードゲームは、個人がどのように行動すると地域はどのように変化するかをシミュレーションしながら考えるためのものである。地域や世界規模の社会課題を自分事として理解し易くするため、山形の身近にある題材を扱い、それらが地域に与える影響を社会、経済、環境のパロメーターによって視覚化した。本ゲームを使用したワークショップを、県立遊佐高校の授業とガールスカウト山形県連盟の集会で実践した。終了後のアンケートでは、大半の参加者が、SDGsが自分にも関係していることがわかったと回答した。SDGs達成に向けては具体的に行動することが重要であるが、まずはSDGsを理解し、目を向ける姿勢が第一段階としてある。山形の身近な事を組み込んだ本ゲームは、そのきっかけとなり得ることが期待される。(佐藤朋子)



卒業・修了展での展示の様子(上)  
カードゲーム見本(下)

講評

近年、SDGs(持続可能な開発目標)が、企業、教育、自治体など様々な分野で関心を集めている。その中で佐藤朋子さんは、SDGsと東北芸術工科大学の親和性を感じ、アートやデザインの力は環境問題の解決に貢献できるはずと確信。そこで、山形という地域性を取り入れたSDGsゲームの制作を行い、各方面からの関心を呼んだ。様々なグループや学校に出向きながら試行を重ねた。最後の発表では、本学科4年生全員の卒業設計、卒業研究をSDGsの17ゴールに即してマッピングを行い、多くの学生の成果がSDGsと大きな関連性を持っていることを示した。(三浦秀一)





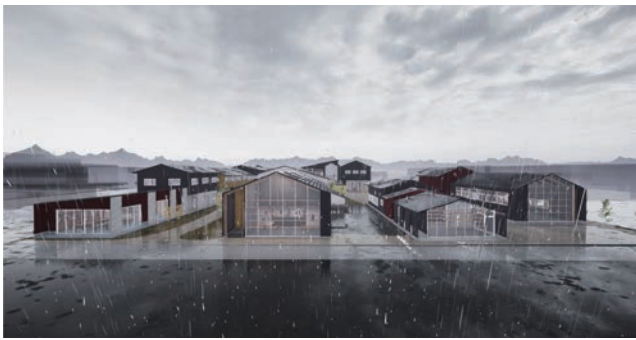
御殿堰再生計画 —親水空間ヘリノベーション— 大宮拓真  
講評

山形の五堰のひとつ、御殿堰を利用し、様々な場所を作るプロジェクトである。御殿堰は元々農業用水であったが、生活用水としても使われてきた水路である。2001年に五堰を地域振興に役立てようと有志の会が発足し、清掃活動や啓蒙が進んでいる。しかし、なかなか総合的な親水空間とする全体計画は存在していない。大宮拓真はカフェやベンチ、あるいは噴水公園の改良などで、その全体を示そうとした。彼の模型を辿っていくとその全体像とともに、個別な箇所での豊かな空間を擬似体験できる。地域にとっても意義深い提案である。(竹内昌義)



都市からの分離と持ち運べる空間 村田隆行  
講評

折り畳み可能な空間とその展開について、手を動かしながら愚直なまでに探求した作品である。プリーツによる折紙建築について既往研究の調査と併せて手を動かしながら試作を繰り返し、力学的特性と美的感性の両面から理想の空間を追求する過程のプレゼンテーションは美しく、その探究心とデザインについて高く評価された。自らが考案した空間はどのような場面で求められるかという社会的意義についても考察していたが、それ以上に講評会で原寸大の折紙建築が立ち上がった時には感動すら覚え、卒業制作ならではの意欲作であった。(西澤高男)



職人の風景 —職と生活と地域の関係— 桑原和則  
講評

山形の古くからの鋳物などの伝統工芸の町、銅町を題材とした、そこに働く人と観光として訪れる人のための、施設の設計である。町工場など周囲の建物のスケールに合わせた新築のギャラリーが立ち並ぶ。伝統芸能は職人技によって作られ、そのほとんどは人の目には触れないが、それを活性化させるための交流施設として考えられた。プレゼンはARCHICADというBIMソフトによるもの。模型よりも実際の仕上がりに近く表現でき、建物の中を画面上で歩くこともできる。今までは設計、模型、プレゼンの順で制作してきたが、設計と同時にプレゼンが可能になる。(竹内昌義)



高齢者施設の複合化における世代間交流  
—山形県寒河江市を対象として— 武田拓郎

山形郊外に建つ高齢者施設の設計。街に開かれ、誰もが立ち寄れる銭湯や店舗、畑やカフェが混在している。高齢者も住みながら働いているため、施設と言うより自然に発生した集落のような風景が展開され、ここで暮らすのは楽しそうだ。武田拓郎は、介護施設で働いている母親の姿からこの建築を着想した。数多くの現場で取材を重ねた上で設計されており、作品からはリアリティーが溢れ出ている。今後、機能重視の福祉施設から、このような暮らしを中心にした心地よい居場所が求められるはずだ。次の時代を見据えた示唆的な作品である。(馬場正尊)



商店街の再興 ―空き物件の利活用― 松川遥菜  
講評

駒ヶ根の商店街のリノベーションである。実家が商店街にある松川遥菜は、町の人が集まって見る映画上映イベント「みんなのリビング」、古着を持ち寄って交換する「みんなのクローゼット」と名付けたイベントを行い、コミュニティを顕在化させた。地元の活性化につながる活動として、そこにゲストハウスを作る計画が卒業設計である。まちを動かすためには、絵を描くだけでは不十分で、実際に行動しレスポンスを受け、変更しながら活動していかねばならない。この研究ではその試行錯誤、実際に活動したことを評価したい。(竹内昌義)



戸建住宅におけるヒートショック解決を目的とした  
ゾーン断熱のあり方 迎田峻真

講評  
冬になると寒い家の断熱がどうなっているか、建築の見えない裏側に着目した。迎田峻真は自宅の屋根裏に上り、狭い床下にもぐり、断熱欠損を発見。風呂の断熱はホームセンターの断熱材でDIYした。町内会でそのことを発表する機会をもらおうと、ご近所の家からも調査依頼を受け、断熱の実態を明らかに。そして、様々な対策をシミュレーションしてたどり着いたのが断熱DIYである。また、これだけ多くの家の裏側をのぞけたのは、地域の温かいコミュニティがあるからだ。(三浦秀一)



山形県長井市における散居集落の研究  
―散居集落における生活様式の実態とその特徴― 会田朋史

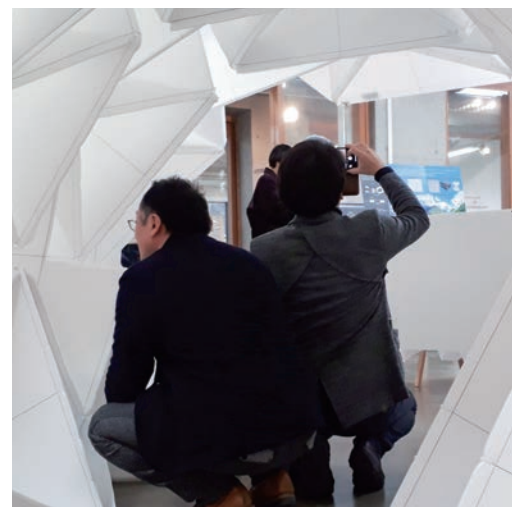
講評  
国重要文化的景観「最上川上流における長井の町場景観」は、その背後地である農村集落や山の資源に支えられていた。そしてその集落は、水害に耐えながら水を巧みに利用し、厳しい東北の冬を凌ぐ工夫を屋敷に施しながら、効率的な生産活動（農業・養蚕）を行う姿を形成していった。それが長井の散居集落景観である。会田朋史は、その成り立ちと特徴を丁寧に調査して分析した。基本的な住まい方・暮らし方の形はあるものの、その応用や変形を確認するために分類を行い、長井の散居集落の典型を論理的に説明した点が優れている。(渡部桂)



無人産直サービスの可能性  
―青森県平内町藤沢地区を対象とするケーススタディー― 貝守らら子

講評  
この研究では、とてもシンプルな無人の産直を取り上げて、その様々な可能性を明らかにした。対象は青森県東津軽郡平内町に設置された産直「ふんちゃ」である。生産者、消費者へのアンケート調査により、産直が生産者と消費者を直結し地産地消の経済循環に寄与していることを明らかにした。また、調査だけに止まらず、ワークショップを開催して産直の運営改善の実践も行った。この取り組みが産直に関わる人々を巻き込み、お互いの絆を強くするという好循環も生み出した。小さな取り組みが大きな波紋を生み出すことを実証した。(吉田朗)





審査前に展示作品の前でプレゼンを行った（上）  
公開審査では学生と教員でディスカッションしながら採点していく（下）

プレゼンによって教員も作品への理解を深めていく（上）  
1/1スケールの作品など、多くの力作が出揃った（下）

本年の卒業研究、論文と制作はいずれも力作が多かった。そのため、例年なら受賞する可能性があったものでも選外になった作品もある。2019年度から論文と設計を分け、それぞれの基準を明確化して、賞決め審査会に臨んだ。こうすることで、論文と設計の違いでの評価の差をなくそうとした。

2月に実施する賞決め審査会の発表者は、1月の最終発表会の時点で10名（設計6名、論文4名）選抜き、本学の卒業展示会の内覧日でもある賞決め審査会当日に、実際に展示された作品を見て、敗者復活として設計・論文から各1名選抜した。

設計では、実物大の折り紙構造を作成した、村田隆行の「都市からの分離と持ち運べる空間」と、人の行動に合わせて空間を作った庄司桃子の「人がいる 動く 形になる」がとても本学らしい作品である。敗者復活では、これからの終末施設について考えられた、川村茉莉の「暮らしのアポトシス」が選ばれた。

論文では佐藤朋子の「山形版SDGsシミュレーションカードゲームの開発」が、他の作品を抑えて最優秀となった。会田朋史の「山形県長井市における散居集落の研究」は地道な調査の結果としての蓄積、敗者復活で選ばれた阿部拓也の「集落から

見る集まる形の遷移」は交通と集落の形の遷移の関係がよく見て取れた。いずれも、優れた取り組みと言えよう。（竹内昌義）

| 賞    | 氏名    | 作品名                                     | 分野 |
|------|-------|---|----|
| 最優秀賞 | 佐藤朋子  | 山形版SDGsシミュレーションカードゲームの開発                | 論文 |
| 優秀賞  | 大宮拓真  | 御殿塚再生計画ー親水空間リノベーションー                    | 設計 |
| 優秀賞  | 桑原和則  | 職人の風景ー職と生活と地域の関係ー                       | 設計 |
| 優秀賞  | 村田隆行  | 都市からの分離と持ち運べる空間ーモバイル建築におけるブリーツとその利用方法ー  | 設計 |
| 奨励賞  | 松川遥菜  | 商店街の再興ー空き物件の利活用ー                        | 設計 |
| 奨励賞  | 庄司桃子  | 人がいる 動く 形になる                            | 設計 |
| 奨励賞  | 武田拓郎  | 高齢者施設の複合化における世代間交流ー山形県寒河江市を対象としてー       | 設計 |
| 奨励賞  | 川村茉莉  | 暮らしのアポトシスーこれからの終末施設ー                    | 設計 |
| 奨励賞  | 貝守らら子 | 無人産直サービスの可能性ー青森県平内町藤沢地区を対象とするケーススタディーー  | 論文 |
| 奨励賞  | 迎田峻真  | 戸建住宅におけるヒートショック解決を目的としたゾーン断熱のあり方        | 論文 |
| 奨励賞  | 会田朋史  | 山形県長井市における散居集落の研究ー散居集落における生活様式の実態とその特徴ー | 論文 |
| 奨励賞  | 阿部拓也  | 集落形態から見る集まる形の遷移ー新庄市泉田を対象地域としてー          | 論文 |





### 講評

本研究は、ランドスケープ研究領域に含まれる都市緑化、食物生産、景観形成の視点を基盤に、食べられる植物で構成された生産基盤を都市空間に応用することにより、市街地の人的活動の活性化をいかに引き起こすかを主眼としていた。空洞化する都市に「緑に関わる楽しみ、育てて食べる楽しみ」を落とし込むことで、それに特化した新たな人的繋がりや活動が発生し、都市に人が訪れる新規の目的が創出されることを仮説とした。そのためには食べる活動と、都市の空間性に特化した装置（植栽基盤）の開発も必要であり、それらが総合されて新たな都市景観（あるいは機能空間、活動）が生まれ、活動と景観が相関しながら増殖することを目論んでいた。時間的制約により、限定された空間の創出と実験運用に留まったが、その実践を果敢に行い、街中に具体的に食べられる植物で構成された空間を出現させてみせた。また、商店街の店主を巻き込んだ活動実験までを行い、仕組みとしての可能性に迫った。最終的にはそれらの実験結果や課題を総括し、地方都市における、食べられる景観づくりの可能性の端緒を、ヴィジュアルとして提案した。研究の概念と意義、方向性、実験結果を社会に提示し、今後の都市の姿を議論できる段階まで研究が到達したことは、研究発展の足がかりを残した意味で大きな成果であった。（渡部桂）



卒業・修了展での展示の様子（上）  
都市空間に適した植栽基盤を実際に作成し、実験を行った（中）  
模型によって設置方法をシミュレーションできる（下）





### ブラウジングシティ

—エリアリノベーションの実践と現象的建築の模索— 追沼翼

#### 講評

追沼翼の研究は、建築を構築物としてではなく、社会や時代が作り出す現象として捉え直してみようという試みである。

彼は大学院時代に起業し、山形市の中心市街地をフィールドに数々の実践的なプロジェクトを手がけた。閉じていた街角の書店「郁文堂」をクラウドファンディングで資金調達をして再生。その前面道路ではパブリックスペースの可能性を示す「シネマ通りマルシェ」を開催した。また、ここで作られた屋台のプロトタイプは、素人にも制作が容易で安価であるため、日本中で使われるまでに普及し、社会実験のシンボルともなった。

リノベーションばかりでなく仮設建築、社会実験など出来事、すなわち現象を起こすことで、風景の変化の可能性を示した。結果的にそれらが柔らかなインフラとなり、エリアを変えていくきっかけとなっている。計画ありきで始まる20世紀型の建築から、小さな出来事を紡ぎながら風景を作っていく、これからの建築や都市の生成プロセスを示した素晴らしい活動と論文である。(馬場正尊)



郁文堂書店の模型



### ウォーカブルディクショナリー

—歩きたくなる都市を作るための小さなデザインと境界— 渡邊遥奈

#### 講評

車中心に作られた20世紀型の都市から、歩くこと、人間を中心に据えた都市へ、新たな街路のデザイン手法の研究である。

人々は街路のどのような場所に佇み、どんな空間や仕掛けがあれば生き生きとした活動が誘発されるのか。渡邊遥奈は山形や東京の街角から、ニューヨークなど海外に至るまで、人間と街路空間との関係をつぶさに観察し、記録していた。その過程で発見したのは、小さなデザインが文章のように連なり、ストーリーを持つことで空間が生成されるべきであるということだ。

彼女はその成果を、「ストリートデザイン・ディクショナリー」としてまとめている。そこで示されているのは、例えば街路における小さな段差や、ちょっとした素材の差など、人間は微妙な事象を感じ取り、それを行動に反映させていること。コミュニケーションを誘発するための適切な距離感が存在していることなど、これは今後の街路を設計するにあたり、従来にないデザイン言語を示している。

奇しくも2020年に国土交通省は「ウォーカブル推進都市」の政策を始めることとなった。この研究は、都市の新たなトレンドを先取りするものであった。(馬場正尊)



ストリートデザイン・ディクショナリー



### 鮭川村 空き家再生プロジェクト

山形県内で問題となっている空き家対策の一環として山形県が募集した活用事業に名乗りを挙げた鮭川村が、山形県建築住宅課、山形県住宅供給公社、東北芸術工科大学西澤研究室との協働<sup>\*1</sup>で、村内の空き家を移住促進住宅にリノベーションするプロジェクトを実施。まず村内の空き家を調査し、対象物件を絞り込みの上決定。現地調査を経て、学生たちが2つの改修案を作成。鮭川村空き家等対策協議会の方々にコンペ形式で公開審査をしていただき、案を決定した。東京で開催された移住促進セミナーにも学生たちが参加。移住促進住宅についての広報を行いつつ移住希望者からの要望をヒヤリング、改修設計に活かした。採用されたのは1階のリビングとダイニングの間を広い土間が貫通するという挑戦的な提案。昔の住宅を彷彿とさせるとの好意的なご意見をいただき、部屋の仕切りを可能な限り撤去した開放的な間取りを実現。住まい手が必要に応じて手を入れる余地を残し、DIYを楽しみたいというご要望にも応えた。寒冷地での開放的な間取りを住みやすくするために断熱と気密にも配慮した設計を行い、一部断熱工事は学生たちや地域住民の方々によるDIYワークショップで施工した。(西澤高男)

\*1 2019年12月に地域づくり協定を締結



リノベーション案 公開審査の様子



### 気仙沼大沢地区 復興支援プロジェクト

2019年は東日本大震災の発災から8年が経過したことになる。復興は集中復興期間から創生期に入っている。学科有志が通う気仙沼大沢地区は、震災直後は当面新しい暮らしの場を築くことが目標であったが、高台移転を終えた今、ショックからの立ち直りで一層強化された地域の人的繋がりを、今後の真の復興に向けて展開するステージに入った。現在、同地区は「大沢地区まちづくり協議会」が活動を牽引している。2018年度は活動拠点となる大沢カフェが完成した。今年度は、この拠点施設を活かしながら、新たなまちづくり活動を興し、地域の自立的持続的活動の基盤を形成する目標のもと活動を行った。6月には大沢カフェのお披露目を兼ねた地区初のメルカート（マルシェ）が開催され、運営に協力した。8月には同カフェを会場に夏祭りが開催され、学生が屋台を運営した。11月の賀茂神社例大祭の運営も支援した。12月には先代大沢カフェのデッキ解体材から木製ベンチを制作し、新大沢カフェの外部空間機能を高める活動を行った。3月の大沢カフェ定点観測写真展は新型コロナウイルス感染拡大影響を受け、最低限での開催となった。今後も協働する神戸大学、横浜市立大学、武庫川女子大学、宮城大学とともに活動を継続する。(渡部桂)



初代大沢カフェの廃材からベンチを制作





#### 早戸温泉環境整備実習

福島県大沼郡三島町早戸温泉遊歩道を中心とした環境整備を行うプロジェクトである。招聘講師4名（廣瀬俊介氏、田賀陽介氏、阿部聡史氏、工藤まい氏）と渡部が指導・運営を担った。今年度は活動10年目の節目を迎えた。

現地での活動時間を充実させるため、前年までの4泊5日を6泊7日に拡大し、8月26日～9月1日の日程で実施した。学科を中心に学生27名、OBOG 5名が参加した。活動10年目であることから、学生の実習に加え、外部参加者も含めた技術研修の場として位置付けた。京都大学から学生1名、福島県宮下土木事務所から4名、地元建設会社から2名の参加があり、本実習の新たな可能性を感じることができた。整備としては、過去9年に整備した中から劣化した箇所や、新規の整備箇所を整理し、柵等の補修、石畳の浚渫、遊歩道路面の排水強化、新設の柵と石積みの施工を実施した。本実習の根幹には近自然工法（動態である自然、生態系に配慮した空間形成技術）があるが、特に木材等は経年劣化があるため補修が必要であり、それを今回、当地で生産された木材で実施できたことは、意義が大きい。また、滞在集落の住民との対話や、集落に接する林縁の管理作業を行い、山間集落の持続的土地利用について考察と実践を行った。加えて中日には、これまで整備してきた空間の環境の変化をデータとして把握するために植生調査も行った。

10年間の活動実績により、技術的実践研究の場、学生実習の場、体外研修の場として活動が充実してきた。またそれらの来訪が地域活性化として期待されており、今後も三島町、地区自治会、地元協力者等との連携を深め、活動を発展させたい。（渡部桂）



#### 山形リノベーションスクール

リノベーションスクールとは、街に数多く存在する空き物件を対象とし、その活用についての企画、デザイン、運営手法までを構築、実際に建物のオーナーへプレゼンまで行う実践的なワークショップである。現在、全国で都市再生の有効な手法の1つとして数多く開催されている。山形でもシネマ通りなどをフィールドとし、今まで3度行われ成果を上げてきた。

4回目となるリノベーションスクールの対象は山形市中心市街地に建つ旧第一小学校。昭和初期に建てられた廃校の活用プログラムとデザインを考える。学生たちはワークショップのメンバーとして、または現場を支えるスタッフとして参加し、社会人と対等に議論や運営に加わった。街やリアルな社会に触れる貴重な場である。

2泊3日のスクールでは様々なドラマが生まれた。最初はよそよそしかったチームも時間が経過するにつれ徐々にまとまり、後半にはそれぞれの個性やアイデアが交錯する活発な場となった。最終日の公開プレゼンテーションでは、地域の廃材を集め、リデザインするための拠点や、植物と飲食施設が融合した新たなビルディングタイプなどの提案がなされた。どれもこの場所ならではの、山形ならではの文脈を汲み取った内容であり、リアリティも高かった。現在その中のいくつかは実践に向けて試行錯誤中である。

2020年に、この第一小学校は「山形クリエイティブシティセンター（仮称）」としてオープンすることになっている。山形におけるクリエイティブ産業を創出するための拠点である。今回、リノベーションスクールで構想、提案された事業が、実際にこの場所で実現する可能性もある。（馬場正尊）



### 小屋づくりプロジェクト

毎年夏になると、学生たちは県北の金山町にある旧林業センターで合宿を行う。ここはかつて地元の人たちが宿泊して研修などを行った場所であるが、しばらく空き家になっていた。学生たちは地域に貢献できる活動の場として、この建物にあれこれ手を入れながら、毎年様々な活動を行っている。雪深い金山の冬籠りの後、毎年掃除をしながら蜂の巣の有無や状態を確認することから活動は始まる。今年のモノづくりは多彩であった。女子学生が要望した「ドレッサー」、清家清自邸の移動畳を想起させる「可変式小上がり」、4年生が以前から計画していた「ピザ釜」、他にも「ゴミ箱」、「照明」、「ハンモック」などが作られた。地域の人たちを招いて行われたイベントでは、「麻縄椅子づくり」「木片コースターづくり」のワークショップが開催された。麻縄の椅子は、事前に試作品をいくつも作って、納得のいくクオリティと製作しやすさを考慮したものである。コースターは、木の板に型取りした紙を置いてその上から塗料を塗って、参加者が思い思いの図柄と色を付けて作り上げていた。完成したピザ釜で焼かれたピザは美味であった。(山畑信博)



学生たちが作成したピザ釜



### 「サウナのあるところ」フィンランドサウナDIY

—山形ドキュメンタリー映画祭「フィンランドサウナ×映画」プロジェクト—  
フィンランドと日本の国交樹立100周年である2019年の山形国際ドキュメンタリー映画祭では、フィンランド映画を特別上映した。フィンランドの様々な人たちのサウナでの様子が丁寧に描かれている「サウナのあるところ」(ヨナス・バリヘル、ミカ・ホタカイネン監督)の上映に合わせ、全国的な温泉地でもある山形でフィンランドのサウナ文化を紹介して体験していただくためのフィンランドサウナを映画祭会場の山形市民会館前にDIYで製作、設置した。サウナ研究家の東海林美紀氏、建築家で木造建築やフィンランドのサウナ文化に詳しい廣瀬隆志・中村朋世両氏、そして建築・環境デザイン学科出身の大工である荒達宏氏と東北芸術工科大学西澤高男研究室との協働で製作したサウナは、床下にキャスターを取付けた移動可能な小型の木造建築だが、薪ストーブの上でサウナストーンを熱してロウリュ(熱したサウナストーンに水をかけて水蒸気を発生させる入浴法)ができる現地仕様を可能な限り忠実に再現するものになっており、内部で火を安全に使うための防耐火対策を施している。当日はフィンランドのサウナ文化を温泉文化の地・山形に再現し、多くの来訪者に楽しんでいただいた。(西澤高男)



学生たちによるサウナ小屋の施工風景



## 各種講演会



### 環境的未来型 西村佳哲氏

西村佳哲氏は、徳島県神山町で活躍されているプランニングディレクターである。「自分で仕事をつくる」「いま、地方で生きるということ」などの著作がある。また、震災復興など様々な分野でワークショップを行いながら、言葉を大切に活動されている。テーマは「プロジェクトとルーティーン」。今までのプロジェクトに向かい合う姿勢、あるいは日常での振る舞いに関してレクチャーしていただいた。(竹内昌義)



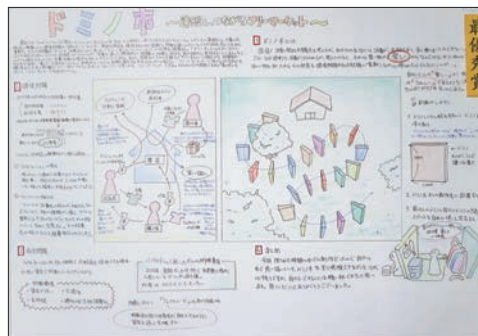
### ワンデイプロジェクト 小板橋基希氏

テーマは「楽しい建築」。2019年度は、本学の卒業生でグラフィックデザイナーの小板橋基希氏に出題をお願いした。実は、小板橋氏は元々環境デザイン学科（現在の建築・環境デザイン学科）に在籍しており、在籍中に写真に興味をもち、情報デザイン学科（現在の映像学科・グラフィックデザイン学科）に転科された。その後、紆余曲折を経て、グラフィックデザイン事務所を立ち上げたという経歴を持つ方である。山形ではシネマ通り沿いのとんがりビルに事務所があり、まちづくりや様々なグラフィックの仕事をしている。そこに通底しているテーマが今回の出題であった。「楽しい」はよく考えると、誰にとって楽しいのか色々考えることができ、難しい概念である。最優秀賞は当時1年生の澤崎桃葉が提案した「ドミノ市」。買い物楽しさを得つつ、発展途上国にとってもフェアトレードを促すきっかけになる装置としての建築である。楽しさは楽しさだけではなく、人のためにも役に立つことで、余計に楽しくなるというプロジェクトである。もともとワンデイプロジェクトは何年生でもアイデア次第で勝ち残れる仕組みになっているが、この案の懐の深さはとても1年生のものとは思えないものであった。(竹内昌義)



### 環境的未来型 東野唯史氏

東野唯史氏は、長野県下諏訪で「リビルディングセンター」を営んでいる。そこは地域の人々が集まるカフェに、取り壊される民家から引き取ってきた、手仕事の痕跡が残る貴重な部材をレスキューし、販売する店舗が併設されている。地方都市だから可能な新たな仕事とデザイン手法に、学生たちは大いに刺激を受けていた。(馬場正尊)



最優秀賞「ドミノ市」澤崎桃葉

## コンクール等受賞者の紹介



公開審査会での発表の様子（佐藤朋子）

### JIA東北建築学生賞

主催 公益社団法人日本建築家協会東北支部

- \* 優秀賞「Sustainamuse」佐藤朋子（画像、作品概要掲載）
- \* 奨励賞（東北専門新聞連盟賞）「HACO ーまちへとひらく山形まなび館ー」菅原茉莉・佐藤映・木立鮎美・藤原大輝・佐藤優穂
- \* 特別賞「上桜田のエコタウン」梅澤一燈

JIA東北建築学生賞とは、日本建築家協会（JIA）東北支部が主催する、東北で建築を学ぶ学生向けのコンペである。学生はそれぞれ学校で取り組んだ設計課題をブラッシュアップし、せんだいメディアテークで行われる公開審査会に臨む。審査員は東北で活躍する建築家だ。

本学からは3作品出展し、2019年度は全ての作品が入賞した。優秀賞を受賞した佐藤朋子は、かつて山形の中心市街地で賑わった映画館「シネマアサヒ」の跡地に、界隈の再生を目指す劇場を設計する課題に対し、持続可能な素材とシステムを活用した遊園地のような空間「Sustainamuse」（サステナミューズ）を提案した。「Sustainamuse」はサステナブルとアミューズメントを組み合わせた造語であり、この作品のコンセプトでもある。サーカス劇場を彷彿とさせるファサードで、大人も子供も楽しく過ごせる機能が仕掛けられている。さらに佐藤は、人口減少や気候変動など未来が予測できない状況で、このような娯楽施設が今後どうあるべきかを考えた。その答えとして、建物の素材に地元の木材を使用し、解体・再利用が可能な建築システムを構築させた。娯楽の変化に合わせて建材を再利用し、新たな施設に生まれ変わらせることができる。再利用できない建材はアップサイクルし、木質バイオマスとして利用することが可能だ。街を賑やかす楽しそうな空間と、環境に配慮したサステナブルなシステムを両立させるアイデアは、審査員から高い評価を受けた。（馬場正尊）



優秀賞「かだれ」木立鮎美

### NORTH JAPAN DESIGN AWARD 2019

主催 シェルホームデザイン（株式会社ホリエ）

- \* 優秀賞「かだれ」木立鮎美（画像、作品概要掲載）
- \* 審査員賞（藤野 高志）「そとのいえ」小野晃未
- \* 審査員賞（佐藤 欣裕）「車を捨てよ街へ出よう」菅原茉莉

山形県飯豊町を拠点に住宅建築を手掛けるシェルホームデザイン主催の、建築学生向けコンペである。毎年テーマに沿った建築を提案し、プレゼンを行う。2019年度のテーマは「東北の暮らし」。美しい四季と豊かな自然に恵まれている一方、人口減少や高齢化など様々な課題を抱えている東北。そこで送る豊かな暮らしとはどういったものか。優秀賞を受賞した木立鮎美の作品「かだれ」は、地元の青森を拠点に、農業や行事などその土地の四季折々の魅力を感じられるゲストハウスの提案である。「かだれ」とは津軽弁で「仲間に入って」。青森に住む人と、外から来た宿泊者が交流し、共にその土地独特の暮らしの魅力に気づきかけとなる。（竹内昌義）

### 芸術学会奨励賞

主催 芸術学会

- \* 受賞「卒業研究『山形版SDGsシミュレーションカードゲームの開発』」佐藤朋子

### 東北芸術工科大学学長奨励賞

主催 東北芸術工科大学

- \* 受賞「ツリーハウスプロジェクト」代表：長利咲代子

### 学生主体型授業「合同成果発表会コンテスト」

主催 FDネットワークつばさ

- \* 第1位 李洗庭、遠藤悠、石黒亜月



東北芸術工科大学 デザイン工学部

## 建築・環境デザイン学科 年報2019

Tohoku University of Art and Design

Department of Architecture and Environmental Design, Annual 2019

発行日 2020年8月1日  
編集 西澤高男 菊池優実江  
構成 倉地亜希子  
書式设计 株式会社GKグラフィックス  
印刷 田宮印刷株式会社  
製本 田宮印刷株式会社  
発行 東北芸術工科大学 建築・環境デザイン学科  
990-9530 山形市上桜田 3-4-5

Tohoku University of Art and Design  
3-4-5 Kami-Sakurada, Yamagata 990-9530, Japan

Telephone 023-627-2000

Fax 023-627-2081

URL <http://www.tuad.ac.jp/>

E-mail [nyushi@aga.tuad.ac.jp](mailto:nyushi@aga.tuad.ac.jp)



東北芸術工科大学

990-9530 山形市上桜田 3-4-5

Tohoku University of Art and Design

3-4-5 Kami-Sakurada, Yamagata 990-9530, Japan

Telephone 023-627-2000

Fax 023-627-2081

E-mail [nyushi@aga.tuad.ac.jp](mailto:nyushi@aga.tuad.ac.jp)